研究

万葉集における「雲」考

和田周子

これは、昭和四十四年度提出の卒論の抜萃である。紙面の都合上、第一章「雲の種類と詠歌数」、及び第二章「雲についての考察」にしぼって述べる。

一、雲の種類と詠歌数

万葉集は、その本質について、「生の直接的表現」であるとか、「生々しい感動」であるとか言われている。又、作家態度が現実的写実的で、その歌は現実生活における感動をすこしも飾らず、大胆率直に表現したものである。故に、そこにとりあげられた題材は、後世の和歌のように、いわゆる花鳥風月に限定、固定しないで、自由に歌の題材として自然及び人生に美を見出している。

このような性格の万葉集の総歌数四五一六首中、なんらかの形で雲が詠み込まれているものは、一九八首で、その比率は全体の四・三八%である。（なお、一九八首中には、一首中に二回あるいは三回、雲が詠み込まれているものもあるが、比率は、全部を一首として計算した）

次に示すのは万葉集に詠み込まれている雲の種類と、その詠歌数である。

第一表

雲	65	にぬぐも（布雲）	1	八雲さす	1	雲の波	1				
旦雲（あさくも）（朝雲）	1	八重雲（ゆふがくも）	1	雲居なす	3	雲離れ	1				
天雲	29	夕居雲（よこぐも）	1	青雲の	1	雲間	2				
青雲	4	東細布	1	白雲隠り	1	雲居	20				
下雲	1	天雲の	12	八重雲隠り	1	雲居隠り	2				
白雲	28	白雲の	3	雲隠り（る）	23	計（重複8）	206				
豊旗雲	1	浪雲の	1	雲の衣	1						

表からわかるように、単なる「雲」が六十五首と最高を占め、以下は「天雲」、「白雲」、「雲隠り（る）」、「雲居」という順位になっている。その他にも「青雲」、「朝雲」、「豊旗雲」、枕詞の「天雲の」、「白雲の」などがあり、このことからも万葉人の雲に対する関心が窺われるといえよう。この中でも特に詠歌数の多い「雲」、「天雲」、「白雲」について考察してみたい。

二、雲についての考察

1、「雲」

第一表に示したごとく、「雲」は六十五首と最高を示している

が、各巻ごとの内訳は次表の通りである。

第二表

雲	巻
2	一
2	二
4	三
6	四
2	五
1	六
8	七
4	八
3	九
4	十
6	十一
4	十二
2	十三
9	十四
0	十五
0	十六
1	十七
1	十八
3	十九
3	二十
65	計

巻十五、十六を除いたすべての巻に、一乃至九の用例がみられる。それではこれを部立別にみるとどのようになるであろうか。

第三表

巻	部立名及び詠歌数	巻	部立名及び詠歌数
一	雑歌2	十一	古今相聞往来歌類之上6（寄物陳思6）
二	挽歌2	十二	古今相聞往来歌之下4（寄物陳思歌1 問答歌1 羈旅発思1 悲別歌1 挽歌1）
三	雑歌2 挽歌2		
四	相聞6	十三	相聞歌1
五	雑歌2	十四	東歌9（未勘国相聞往来歌）
六	雑歌1	十五	／
七	雑歌5 譬喩歌1 挽歌2	十六	／
八	秋雑歌4	十七	1
九	雑歌3	十八	1
十	春相1 夏雑1 秋雑1	十九	3
	冬雑1	二十	3

分類の行なわれないもの

ところで万葉集の主な部立としては、雑歌、相聞、挽歌の三つをあげることができる。しかし、巻ごとに分類基準が異なつているため部立による分類は整然としていない。だが、部立を考える場合、分類基準に混乱がみうけられるとしても、大体、雑歌、相聞、挽歌の三種に分けられるとみてよいと思う。（くわしくは提出の論文を参照していただきたい）

よって「雲」の部立内訳は、

第四表

雑歌	相聞	挽歌	計
25	31	9	65

となる。相聞歌が三十一首と最も多く、次が雑歌二十五首、挽歌九首の順である。

相聞に詠まれた「雲」が一番多いが、その内容は恋の歌二十九首、それ以外の歌二首であつて、恋の歌が圧倒的多数を占めているといえる。だが、恋の歌以外のものも相聞の中に含まれていることは、万葉集の相聞歌が単に恋の歌のみにとどまらずに、もっと幅をもったものであるところの所以であろう。

圧倒的多数を占める恋の歌二十九首に詠み込まれている「雲」について内容的に検討してみよう。

第五表

1、譬喩的役割の雲	14首
2、人をしのぶものとしての雲	6首
3、羨まれる存在の雲	4首
4、月にたなびく雲	3首
5、実景の雲	1首
6、脇役的な雲	1首
計29首	

このうち一番多いのは、1の譬喩的役割の雲で、雲のもつ性格や状態を譬喩的にとらえそれを恋慕の情の表現としたものである。

大伴坂上家之大娘報二贈大伴宿禰一家持一歌

巻四584　春日山　朝立雲之　不居日無　見巻之欲寸　君毛有鴨

は、「春日山に朝立つ雲の居ない日の無いように、いつもお会いしたい君であることよ」の意で、雲の「居ぬ日無い」という性格をとらえ、「春日山朝立つ雲の居ぬ日無く」という序詞によって、譬喩的に作者の心が表現されている。このような例は他にも、

中臣女郎贈二大伴宿禰家持一歌

巻四677　春日山　朝居雲乃　欝　不知人爾毛　恋物香聞

大伴宿禰千室歌一首

巻四693　如此耳　恋哉将度　秋津野爾　多奈引雲能　過跡者無二

大伴宿禰像見謌

巻四698　春日野爾　朝居雲之　敷布二　吾者恋益　月二日二異二

巻十四3511　安乎禰呂爾　多奈婢久君母能　伊佐欲比爾　物能乎曽於毛布　等思乃許能己呂

があるが、いずれも雲の「おぼぼしい」、「過ぎる」、「しくしくたる」、「いさよう」状態をとらえ、その雲の状態を借りて、序詞によって作者の恋慕の情を表現しているといえる。

ところで　譬喩的役割の雲のうち気付かれることは、序詞が用いられている例が多いことである。十四首中、十一首に序詞に雲が用いられている。このように恋慕の情の譬喩的表現に雲をつかった序詞を用いたことは、どのような意図が隠されているのであろうか。相聞歌特にこの場合、恋の歌においては、自分の心を如何に相手に訴え、聞きとどけてもらうかが重大なことであるだけに、その訴える効果の大なる表現が必要とされる。そこで雲が詠者の要求にかなったものとして取り上げられ、恋の歌の表現に一役かったのではあるまいか。境田四郎氏も「枕詞と序詞」（万葉集大成6言語篇参照）の中で述べられているが、序詞の表現に雲を用いることは、習慣的なものとなっていたことも十分考えられる。だが習慣的なものとなっていたことは、序詞の表現に雲を用いることを当時の人々が率直に受け入れたためであり、それは詠者の要求にかなっていたからこそであろう。

2の「人をしのぶものとしての雲」は六首である。例えば次の三首をみてみよう。

巻十四3515　阿我於毛乃　和須礼牟之太者　久爾波布利　禰爾多都久毛乎　見都追之努波世

巻十四3516　対馬能禰波　之多具毛安良南敷　可牟能禰爾　多奈婢久君毛乎　見都追思怒波毛

巻十四3520　於毛可多能　和須礼牟之太波　於抱野呂爾　多奈婢久君

母乎　見都追思努波牟

以上三首とも東歌であるが、「私の顔の思い出せなくなった時には、地上から湧き上って嶺に着く雲を見ながら私をしのんで下さい」(3515)とうたい、「対馬の国の山には、下の方の雲がありはしない。それ故、上の山にたなびく雲をみながら妹を思おう」(3516)と答え、また「顔の形が忘られる時は、大野にたなびく雲をみて思いしのぼう」(3520)とうたっている。「嶺に立つ雲をみつつしのばも」「たなびく雲をみつつしのばも」と用いられた表現は、東歌が東国地方の民謡であることから、習慣的表現であったのであろう。

3の「羨まれる存在の雲」の例としては四首みられる。例えば、次の二首をみてみよう。

巻　四　534　安貴王謂一首

〜　水空往　雲爾毛欲毛　高飛　鳥爾毛欲成　〜
久堅之　天飛雲爾　在而然　君相見落日莫死

巻十一　2676

なかなか会えないことを嘆く心から、空をゆく雲でもありたいと願った歌であり、雲の「動く」性格に注目して詠んだものといえる。このように空を自由に渡る雲や鳥を見て羨む心は自然に起りうるものであり、交通の困難な状況にあった当時の人の偽らざる心境であったろう。

4の「月にたなびく雲」の歌は二首みえる。これは月に雲がたなびくのを嫌ったものであり、2の場合が雲の出現を喜ぶものであるに対して、これは相反する態度のものといえる。

巻十一　2460　遠妹　振仰見　偲　是月面　雲勿　棚引

月に対して遠くにいる人を思うというのは本能的な感情であって、それを妨害する雲がこの場合嫌われたのもなるほどと思われる。万葉人は雲によって人をしのぶ気持を有する一方、月を見て恋人を思う時には雲を嫌う気持も併せ持っていたと思われる。

5の実景の雲としては一首、

巻十二　3126　纒向之　痛足乃山爾　雲居乍　雨者雖零　所沾乍鳥来

がある。

6の脇役的な雲の例として一首、

巻十四　3522　伎曽許曽波　児呂等左宿之香　久毛能宇倍由　奈伎由久
多豆乃　麻登保久於毛保由

があり、「雲の上ゆ鳴きゆく鶴の」が「遠く」にかかる序詞となっている。雲はこの場合「鳴きゆく鶴」の位置を示すためのものであって、表立った役目は持っていず、脇役的な雲といえよう。

以上、「雲」の用例数の一番多い相聞の部立についてその内容をみてきたが、次に多いのは雑歌の二十五首である。雑歌25首に詠み込まれている雲の内容を示すと次の通りである。

第六表

1、物をかくす（にたなびく）雲 月と雲 山と雲	7首 (4) (3)
2、実景の雲	6首
3、脇役的な雲	3首
4、無常を感じさせる雲	2首
5、使者としての雲	1首
6、その他	6首
	計25首

1の「物をかくす（にたなびく）雲」の七例中、まず④月をかくす（にたなびく）雲は四例で、

春日蔵歌一首

巻九1719　照月遠　雲莫隠　島陰爾　吾船将極留不知毛

の場合、月光をたよりに泊地を求めようとしている。おりしも浮雲が漂ってその月が隠れようとする心ぼそさが感じられる歌である。

大伴家持秋歌

巻八1569　雨晴而　清照有　此月夜　又更而　雲勿田菜引

は、雨が晴れて清く照っている此の月に、又再び雲よたなびくなと願っている。雲と月との関係は相間歌にも現われたものであり、いずれも雲は月にとって好ましからぬ存在のものとなっている。山を雲がかくす（山に雲がたなびく）一例としては三首ある。

額田王下三近江国一時作歌井戸王即和歌

巻一17　味酒　〜　数数毛　見放武八万雄情無　雲乃　隠障倍之也

反　歌

巻一18　三輪山乎　然毛隠賀　雲谷裳　情有南畝　可苦佐布倍思哉

巻七1244　未通女等之　放髪乎　木綿山　雲莫蒙　家当将見

17では見たいと思う三輪山を、雲が「情なく」隠してしまうその無情を恨んだもので、擬人的表現が用いられている。18はその反歌。1244は旅にあるものがその故郷の目標となるゆふ山を眺めて雲のかからぬように願ったもので、雲が山をかくしたり、山にたなびくことはこの場合好ましからぬことであった。

3の「脇役的な雲」は三首ある。

右大臣橘家宴歌七首

巻八1574　雲上爾　鳴奈流雁之　雖遠　君将相手図来津

についていえば、「雲上爾鳴奈流雁之」は「雖遠」にかかる序詞であり、ここでの雲は雁の位置を示すための脇役であるといえる。

4の無常を感じさせる雲の例としては、

弓削皇子遊二吉野一時御歌一首

巻三242　滝上之　三船乃山爾　居雲乃　常将有等　和我不念久爾

のように「雲は常あるものであるが其の雲の如く常ありとは思えない」と雲に喩えて世の無常を嘆いている。

5の使者としての雲は一例

巻八1521　風雲者　二岸爾　可欲倍抒母　吾遠嫗之　事曽不通

この1521の歌は風雲を遠方へ音信を通ずる使者と考えた例で、漢文学からきた発想と思われる。

最後に挽歌九首についてみよう。先に相聞の「雲」のところで、雲を見て恋人を連想し、相手をしのぶという発相があることを述べたが、この挽歌においても同じような発想がみられる。それは雲によって死者をしのぶというもので、例えば、

巻七1407　懣口乃　泊瀬山爾　霞立　棚引雲者　妹爾鴨在武

は、雲をみて、死んでしまった恋しい妹に思いをはせている。その他にも、巻三428、巻七1406、巻十三3325などがあるが、428の題詞に「土形娘子火二葬泊瀬山一時柿本朝臣人麻呂作歌一首」とあるごとく、挽歌の雲には、火葬の煙との関係が大であることが気づかれる。「続日本紀」に、火葬は文武天皇四年に僧道昭を火葬したのが最初であると記載されているが、その是非はともかく、火葬ということが

目新しい時代にあっては、死者がみるみる煙を化するのを見ると、上代よりの信仰に支えられてその煙を雲と見、雲に魂を感じるということは、自然なありうべきことに思える。

2、「大　雲」

第一表に示した如く、「天雲」の万葉集中における詠歌数は二十九首であるが、それを各巻ごとにみると次のようである。

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	計
天雲		3	5	1	1		2		2	3	3		3	1		1				3	1	29

この表でもわかるように、巻一、六、八、十二、十五、十七、十八以外すべての巻に、一乃至五の用例があることがわかる。

それでは「天雲」の部立はどのようなものがあるであろうか。

巻	部立名及び詠歌数
巻二	挽歌3首
三	雑歌3　挽歌2
四	相聞1
五	雑歌1
七	譬喩歌2
九	雑歌1　挽歌1
十	春雑歌1　秋雑歌2
十一	古今相聞往来歌類之上(寄物陳思3)
十三	雑歌1　挽歌2
十四	東歌1
十六	有由縁雑歌1
十九	3
二十	1

これをながめてみると、天雲は巻一の雑歌や巻二の相聞になく、挽歌に集中していることがわかり、この語が挽歌のもつ儀礼性と何らかの関係があるのではないかという推測がもたれる。「天雲」の部立内訳は、次の通り。

挽歌	相聞	雑歌	計
8首	8首	13首	29

「天雲」は挽歌のもつ儀礼性との関係が強いように思い、「天雲」の詠み込まれた挽歌についてみてみようと思う。

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌

巻二167　～　天地之(あめつちの)　依相之極(よりあひのきはみ)　所知行(しらしめす)　神之命等(かみのみことと)　天雲之(あまぐもの)　八重掻別而(やへかきわけて)　神下座奉之(かむくだしいませまつりし)　高照(たかてらす)　日之皇子波(ひのみこは)　～

この歌の内容は天孫降臨についていったものであって、「天雲之八重掻別而」とは、「天の雲の幾重にも重なっているのを分けて」という意味である。「略解」に、「天雲之八重掻別而」について、「神代記、祝詞など同じ古言也」とある。「天雲」の使い方に神話的匂いが感じられるところであるが、他の挽歌についてはどうであろうか。

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌

巻二199　～　神風爾(かむかぜに)　伊吹惑之(いぶきまどはし)　天雲乎(あまいもを)　日之目毛不令見(ひのめもみせず)　常闇爾(とこやみに)

覆賜而〜

歌の意は、「伊勢の神宮から神風が吹き惑わし、日の光も見せず天雲を以って真闇におおいなされて」であるが、この歌の場合も、前の167と同様、内容は神話的性格を帯びたものである。また

巻二205　王者　坐西座者　天雲之　五百重之下爾　隠賜奴

にあるように、「王者　神西座者」と歌ったのは、それが当時の一般的信仰であったことを物語るものである。挽歌の歌は他に、

石田王卒之時丹生王作

巻三420　〜　天地爾　悔事乃　世間乃　悔言者　天雲乃　曽久
　　敞能極　天地乃　至流左右二　〜

天平元年己巳摂津国班田史生丈部龍麿自経死之時判官大伴宿禰三中作歌

巻三443　天雲之　向伏国　武士登　所剤人者皇祖　神之御門
　　爾　外重爾　立候　〜

過二芦屋処女墓一時作歌

巻九1801　〜　玉桙乃　道辺近　磐構　作家矣天雲之　退部
　　乃限　此道乍　去人毎　行因　〜

巻十三3326　〜　劒刀　磨之心乎　天雲爾　念散之　展転
　　土打哭杼母　飽不足可聞

などがある。

さて、「天雲」の使い方において、神話の関連がみられることは先に述べた通りである。「天雲」の「天」という語は、「万葉集辞典」（佐々木信綱著）によると、「大空、天つ神の居処」を示すものであるとされている。「天」に「天つ神の居処」の意があることは、「天雲」の神話性という問題に根拠を与えることになるであろう。

また「天雲」という語が使われる時、それは「天雲の八重」、「天雲の五百重」というように使われ、「幾重にも無数に重なっている」描写をしている。これは儀礼歌などによく用いられる表現であって、その表現は漠然とした感じをもっている。この漠然とした表現が神話の叙述に適合するのではあるまいか。儀礼的な歌という性格上、明確、直接な表現よりも、漠然とした表現の方が神話の叙述―儀礼歌にはふさわしいものであったろう。

ところで、歌体の方からながめると、「天雲」が詠み込まれている挽歌のうち、ほとんどが長歌であることに気付く。短歌は八首中一首を数えるのみである。なぜ圧倒的に長歌に「天雲」は詠まれているのであろうか。それは、長歌が儀礼の場でよく用いられた歌体であることと関係してくるようである。「天雲」はその用いられ方に儀礼歌との関係がみのがせなかったが、その性格が、「天雲」が長歌に多く詠まれている理由と思われる。

このように「天雲」は挽歌の儀礼性と関係の深い位置にあり、「天雲」は儀礼歌の中に現われた歌語といえよう。いずれにしても、「天雲」と挽歌とは関係の深い立場にあり、「天雲」は儀礼歌の中に現われた歌語といえよう。

3、「白　雲」

「白雲」が万葉集中に詠み込まれた歌の詠歌数は二十八首であっ

て、「天雲」の詠み込まれた歌の詠歌数の二十九首とほとんど同数といえる。「白雲」の各巻ごとの出度数はどのようであろうか。

白雲	巻
	一
	二
5	三
3	四
1	五
1	六
2	七
1	八
2	九
3	十
	十一
1	十二
1	十三
2	十四
1	十五
	十六
4	十七
1	十八
	十九
	二十
28	計

右の表をみてわかることは、「白雲」の詠み込まれた歌が、巻一、二、十一、十六、十九、二十にまったくなく、その他の巻では、一乃至五の用例がみられることである。それでは「白雲」の詠み込まれた巻の部立と、詠歌数をみてみよう。

巻	部立名及び詠歌数	巻	部立名及び詠歌数
三	雑歌5首	十	秋雑歌2　冬雑歌1
四	相聞3	十二	古今相聞往来歌類之下（羇旅発思1）
五	雑歌1	十三	挽歌1
六	雑歌1	十四	東歌2
七	雑歌2	十五	1
八	秋雑歌1	十七	4
九	雑歌2	十八	1

これを部立別に合計すると次の通りである。

雑歌	相聞	挽歌	計
19首	6	3	28首

雑歌が十九首と最高を占め、あと相聞六首、挽歌三首となっている。

ここで注目されることは、「白雲」においては、詠歌数の最高を占めているのが雑歌であることである。「白雲」が雑歌に多く詠まれたことは、如何なる理由によるのであろうか。「天雲」と挽歌との関連がみられることを先に述べたが、「白雲」と雑歌の場合にも何らかの関連が見られるのではないだろうか。「白雲」の詠まれた雑歌についてみてゆくことにする。

「天雲」が儀礼歌の中に現れ、その表現は漠然としたものであることを述べたが、「白雲」の場合は「天雲」と違って、現実味を帯びた表現のようである。

詠レ雲

巻七1089　大海爾（おほうみに）　島毛不在爾（しまもあらなくに）　海原（うなばらの）　絶塔波爾（たゆたふなみに）　立有白雲（たてるしらくも）

釈通観歌一首

巻三353　見吉野之（みよしぬの）　高城乃山爾（たかきのやまに）　白雲者（しらくもは）　行憚而（ゆきはばかりて）　棚引所見（たなびけりみゆ）

などは叙景歌といってよいものであって、そこに詠み込まれた「白雲」の「白」という色彩表現が、情景を具体的にしている。

また1089の歌で、「大海に島もないものを海原のゆうめいている浪に立っている白雲よ」と怪しんでいるけれども、当時の人は、雲というものは山の上に立つものと思っていたためである。「白雲」を例にとれば、「白雲」の詠み込まれている歌には、山がよく詠み込まれている。既に例にあげた353の歌には「高城の山」という語があり、その他、

春日王奉レ和歌

巻三243　王者（おほきみは）　千歳爾麻佐武（ちとせにまさむ）　三船乃山爾（みふねのやまに）　絶日安良米也（たゆるひあらめや）

巻七1282　橋立倉椅山（はしたてのくらはしやまに）　立白雲見欲（たてるしらくもみまくのほり）　我為苗（わがするなへに）　立（たてる）

白雲（しらくも）

にも、「三船の山」、「倉はし山」などという語がみえる。「白雲」の詠み込まれている全歌についてみると、「山」という語が共に詠み込まれているものは、二十八首中、十六首に及ぶ。つまり、「山」のない歌の中にも「白雲」は詠み込まれているけれども、一般に「白雲」と「山」とは関係の深い立場にあるといえよう。また「白雲」と対比させて、「青山」という使い方がみられる。そのような歌としては、

湯原王宴席歌

巻三377　青山之（あをやまの）嶺乃白雲（みねのしらくも）朝爾食爾（あさにけに）恒見抒毛（つねにみれども）目頬四吾君（めづらしわがきみ）

過二辛荷島一時山部宿禰赤人作歌

巻六942　～　辛荷乃島之（からにのしまの）島際従（しまのまゆ）吾宅乎見者（わぎへをみれば）青山乃（あをやまの）曽許（そこ）十方（とも）不見（みえず）白雲毛（しらくもも）千重爾成来沼（ちへになりきぬ）～

があげられる。「白」と「青」とが対比してさながら、その情景が目にうつるようである。このように「白雲」は現実味を帯びた具体的な表現をなしているといえよう。

今まで、雑歌の部立に含まれる「白雲」についてみてきたが、なぜ「白雲」が雑歌に多いかということにつけては次の理由があげられる。相聞・挽歌が抒情歌を主としているのに対して、雑歌は叙景歌を主流としているといえるが、前に述べたように、「白雲」は具体的、情景描写的であり、この具体的、情景描写的な「白雲」の性格が、雑歌の叙景歌的性格と一致するためであろう。

結　論

万葉集に詠み込まれている雲についてわかったことを総合すると次の如くになる。

万葉集に詠み込まれている雲の詠歌数は一九八首で、全詠歌数の四・三八％である。その中でも特に「雲」、「天雲」、「白雲」、「雲隠り（る）」、「雲居」が多く、万葉人の雲に対する関心が高かったことをものがたっている。

「雲」の用例六十五首の部立内訳は、相聞が三十一首で一番多く、次が雑歌、挽歌の順となっている。一番多く詠み込まれている相聞は恋の歌が圧倒的で、「雲」が恋の歌の題材としてふさわしいものであったといえる。また挽歌の「雲」に、雲によって死者をしのぶという発想がみられることは注目される。

「天雲」の詠歌数は二十九首で、挽歌の儀礼性との関連がみられる。それは「天雲」の語の持つ漠然とした性質が儀礼歌にあっていたためであろう。そして挽歌の歌体はほとんどが長歌であって、これは長歌が儀礼の場でよく用いられた歌体であることと関係する。

「白雲」の詠歌数は二十八首で雑歌に多く詠み込まれている。それは「白雲」の「白」という色彩表現からもわかるように、「白雲」は具体的、情景描写的性格を有している。つまり、この具体的、情景描写的な「白雲」の性格が雑歌の叙景歌的性格と一致するためであろう。また、「白雲」は「山」と一緒に詠み込まれている例が多い。

以上、第一章、第二章について述べたが、第三章、雲と枕詞、第四章、「雲隠」、「雲居」については、提出の卒論を参照願いたい。